

博多とアジアの映画(110)

松浦 仁

1984(昭和59)年、福岡東宝では翌年の正月興行に入る前の12月1日から14日まで「人蛇大戦 蛇」(1982)が公開された。「人蛇大戦 蛇」は、香港・台湾合作のパニック・ホラー映画で、香港公開から2年後の11月23日に東京で公開され、1週間後に福岡でも上映された。『悪徳建設会社が建設中のマンションの地中から出現したヘビの大群がブルドーザーでひき殺されてしまう。1頭の大ヘビがあらわれて大群の生き残りを率いて報復するが、警察と消防隊が出勤して人間対ヘビの壮絶な闘いが始まる。撮影には大ヘビ以外本物のヘビが使われ、殺されたり、焼かれたりする。ヘビの大群が人を襲う動物パニック・ホラーだが、人対ヘビのカンフー・アクションがあったり、消防隊がヘビを火炎放射器で焼き殺したり荒唐無稽なB級映画だった。

「人蛇大戦 蛇」は、1981年製作のアメリカ映画「カリフォルニアギャルズ」の2本立てで公開された。「カリフォルニアギャルズ」はロサンゼルス郊外のDJが企画した最もエキサイティングなギャルに1万ドルを進呈するコンテストをめぐる騒動を描いていた。全編に70年代から80年代初頭のロック・ミュージックが流れる。8月にテレビ東京系列(福岡はテレQ)の

木曜洋画劇場で「カリフォルニアギャルズ」と題して放映された後の福岡東宝での公開だった。

そして、1985(昭和60)年、香港映画を中心にしたアジアの映画は、ますます映画館で公開された。まず2月には、福岡東宝でユン・ピョウ主演の「チャンピオン鷹」(1981)が公開された。ユン・ピョウは、前年の1984(昭和59)年に日本で公開されたジャッキー・チェンとサモ・ハン・キンポーが出演した「プロジェクトA」(1983、監督 ジャッキー・チェン)と「五福星」(1984、監督 サモ・ハン・キンポー)に出演していて、ジャッキー・チェン、サモ・ハン・キンポーとともに香港3大スターのひとりとして日本でも人気が急上昇し、翌年に主演作が日本で初公開されたのだった。

ユン・ピョウ(本名、夏令震)は1957年香港に生まれ、5歳の時に香港の演劇学校、中国戯劇学院に入学した。特に優秀な生徒を集めたアクション子役集団「七小福」のメンバーに最年少で選ばれ、芸名をユン・ピョウ(元彪)とした。七小福にはユン・ピョウとは5歳年上のサモ・ハン・キンポー、3歳年上のジャッキー・チェンがいた。ユン・ピョウは、中国戯劇学院に10年在籍して京劇と武術を学んだ。

1966(昭和41)年、ユン・ピョウは中国戯劇学院からゴールデン・ハーベスト(嘉禾電影有限公司)に入社しアクション俳優の道に進んだ。70年代に入るとブルース・リー主演の「ドラゴン怒りの鉄拳」(1972)、「ドラゴンへの道」(1972)、「燃えよドラゴン」(1973)に脇役ながら出演した。また、ブルース・リーが撮影半ばで急逝したため未完になっていた「死亡遊戯」(1978)をサモ・ハン・キンポーが監督を引き継ぐことになり、ブルース・リーと体格が似ていたユン・ピョウはブルース・リーのオートバイアクションのスタントをつとめた。そして1979(昭和54)年、サモ・ハン・キンポー監督の「モンキー・フィスト猿拳」に主演して本格的なデビューを果たした。

1984(昭和59)年2月にジャッキー・チェンが主演し、サモ・ハン・キンポー、ユン・ピョウが出演する「プロジェクトA」が日本で公開され3人の人気が沸騰した。そして、6月から3人が出演する「五福星」(香港で公開されたオリジナルはサモ・ハン・キンポーが主演だったが、日本版では再編集してジャッキー・チェンの主演映画に代わった)の公開を記念して7月14日に日本武道館でファン集いの「ジャッキー・チェン in 武道館」が開催された。サモ・

ハン・キンボー、ユン・ピョウも出演して、大勢のファンが詰めかけて香港の3大スターの競演に熱狂した。福岡からもツアーが出るほどの人気だったようだ。ユン・ピョウは3人の単独ライブのコーナーで谷村新司の「昴」を熱唱したのだが、この歌が評価されて日本でレコードデビューすることになった。

そして、翌年の1985(昭和60)年2月にユン・ピョウの主演作「チャンピオン鷹」が日本で公開された。「チャンピオン鷹」は「プロジェクトA」よりも2年前、「五福星」よりも3年前の1981(昭和56)年に製作されていた。香港公開は製作から2年後の1983(昭和58)年10月で、「プロジェクトA」より2カ月早かったのだが、日本では「プロジェクトA」「五福星」が公開されてユン・ピョウの人氣が高まったことによる主演作の公開だった。

「チャンピオン鷹」は日本の配給元である東映が新たに編集して公開され、日本オリジナルの主題歌「Champion at Heart」をユン・ピョウが歌い、キャニオンレコードから発売されることになった。「Champion at Heart」は「チャンピオン



ホールで、11日に東京の後楽園ホール

鷹」公開直前の2月6日に大阪の毎日

で開催された「チャンピオン鷹公開記念 ユン・ピョウ オンステージ」で披露された。

「ユン・ピョウ オンステージ」は大阪公演翌日の2月7日に福岡市中央区の都久志会館(2020年11月3日閉館)でも開催された。おそらく東京や大阪と同じプログラムだと思うが、「チャンピオン鷹」の特別試写会をメインに「チャンピオン鷹」の主題歌「Champion at Heart」などの歌の披露、アクションコーナー、ユン・ピョウインタビュー、ゲームコーナーなど盛りだくさんだった。おそらく福岡、九州だけでなく遠方から大勢のファンが詰めかけて盛り上がったことだろう。

「チャンピオン鷹(原題は「波牛」)は、ゴールデン・ハーベスト(嘉禾電影有限公司)がユン・ピョウを主役に抜擢して製作した、カンフーとサッカーが融合したスポーツ映画だった。監督・脚本はユン・シャンチャン(袁振洋)が担当した。『田舎育ちのトン(ユン・ピョウ)は、都会に出て得意のカンフーを活かし、やがてプロのサッカー選手になる。同じチームの花形選手であるキングが八百長試合で私腹を肥やしていて、チームの現状に失望したトンはライバル・チームに移籍する。活躍するトンに敵対心を燃やすキングは、トンに挑戦状

をつきつける。キングはチーム全員に反則ラフプレーを指示し、壮絶な試合がはじまる…。』

カンフーとサッカーが融合した映画といえば「少林サッカー」だろう。「チャンピオン鷹」から20年後に製作された「少林サッカー」は、香港で歴代最高の興行収入をあげ、2002(平成14)年に日本でも公開された。日本での興行収入は35億円で、年間興行収入8位の大ヒットだった。その先駆けとなったのが「チャンピオン鷹」だった。2001(平成13)年に製作された「少林サッカー」は、撮影後の編集段階でCGを駆使して非現実的な迫力ある映像を多用しているのだが、「チャンピオン鷹」はCGを使うことなく、すべて生身の身体が演じている。だからこそサッカーの試合をしているのに、その動きはカンフー映画のような自然なアクションになっている。たとえばユン・ピョウがサッカーボールを次々に蹴って、カゴにボールを入れるシーンは、フィルムを回し続けて成功するまで撮り続け、成功したシーンのみを使っている。「チャンピオン鷹」には「少林サッカー」の圧倒的な劇画のような迫力はないが、当時の香港映画の醍醐味をあげあつとができる。

次号へ続く
Ⅱ 図版はチャンピオン鷹Ⅱ